



抑制キュウリ 順々に種まきして、長い間収穫を楽しむ

露地栽培のキュウリは春に種まき（晩春に植え付け）、夏に収穫するのが一般的ですが、家庭菜園でも6、7月に種まきすれば、春まきの収穫が終わる頃から新鮮なキュウリがなり始めます。ただし、盛夏期に種まき（または植え付け）するため、高温・乾燥で発芽や活着が不良になりやすく、病害虫の発生が多い時期であること、台風や干ばつなどの気象障害を受けやすいことなどに注意が必要です。

壤水分が適度のときに白マルチを張って乾燥と地温の上昇を防ぎます。前作が果菜類のときは元肥をゼロでスタートし、収穫が始まった頃から追肥を開始します。

「種まき」栽植方法は2条植えでは、条間80～90cm、株間60～70cm間隔にまき穴を作り、1カ所3、4粒をまきます（図1）。育苗する場合は9cmポリポットに2、3粒の種をまき、本葉2枚程度で植え付けます。

「誘引・整枝」つるが伸び出す前に長さ2m以上の支柱にキュウリネットを張り、つるをネットに誘引します（図2）。下から5、6節までの子づると雌花は、全て早めに摘み取ります。6、7節以上の子づるは本葉2枚の上で摘みし、親づるは支柱の高さで摘みます（図3）。

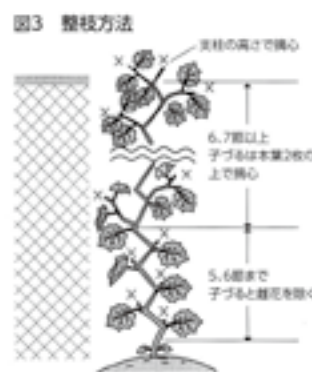
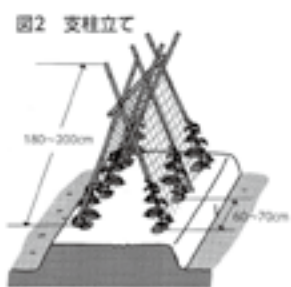
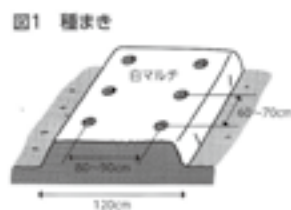
「畑の準備」種まき2週間前までに1平方m当たり苦土石灰200gをまき、土と混ぜておきます。次に、1週間前に化成肥料（NPK各成分10%程度）200g、堆肥2、3kgを散布し、よく耕しておきます。幅約120cm、高さ約10cmの畝を作り、土

「追肥・灌水（かんすい）」肥切れさせないよう2週間ごとに収穫終了前まで追肥を続けます。1回目は果実が取れ始めた頃に1平方m当たり化成肥料30g程度を株の周りに施し、

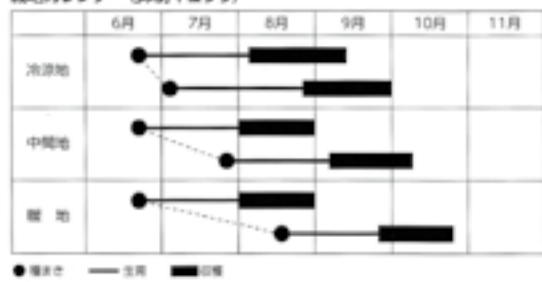
軽く土と混合します。2回目以降は同量を畝の肩に浅く溝を作つて施し、薄く土寄せします。キュウリは特に水分が必要で畑が乾いていたら必ず灌水します。

「病害虫の防除」べと病やうどんこ病は登録農薬で防除します。アブラムシには、粘着くん液剤などを散布します。

「収穫」長さ21、22cm、重さ100～120gが収穫適期ですが、小さくても「もろキュウ」として楽しめます。最盛期は朝夕2回の収穫を心がけ、また草勢が弱ったときには若取りして株の負担を減らし回復を早めましょう。



栽培カレンダー（抑制キュウリ）



※関東南部以西の平たん地を基準に記事を作成しています。

花卉



土壌消毒について

1、クロルピクリン

- 準備** 土の水分状態を適正にする。ハウス内土壌は乾きやすいので、適正な水分状態となるように灌水する。作業開始前にすべての開口部を開ける。ガラス温室では入口や天窓などの開放口をすべて開放する。ビニールハウスではビニールの裾を上げて、通風をよくする。
- 注入・被覆** ハウスの開口部をすべて開放し、保護具を着用して注入作業を行う。注入処理と同時に被覆する機能を備えた土壌消毒機を使用すると便利。注入量は1穴当たり2～3ml
- 作業後** ガスが外に漏れないようにハウスの開口部を全て密閉し、立入禁止の表示をする。臭気が残っている期間はハウス内に入らないようにする。くん蒸後はハウスを開放し、十分換気した後に入室する。
- 安全作業のポイント** 薬液をできるかぎり大気中にさらさない。開栓は風上に立つて行う。保護具を常備する。薬剤は常に日陰や冷暗所に保管する。

2、土壌還元消毒

- 作物残さの整理** ハウス内の作物残さを搬出し、マルチ、かん

- 水チューブ等を撤去する。ハウスの被覆は張ったままにしておく。
- 地面の整地** 耕起を行い畦を崩して地面を均平にする。
- 米ぬかの散布（10a）** 米ぬかを300kg程度施用する。この際、ムラができないように注意する。
- 耕起** 米ぬかを散布後、直ちに耕起する。その際、かん水ムラができぬよう地面を均平に仕上げる。
- かん水チューブの設置** ハウス全面にかん水が行き渡るようチューブを設置する。チューブは60cm間隔に設置し、かん水チューブは能力に応じてハウスに1～4本を設置する。
- かん水の実施** 100～500mmを目安にかん水を行う（㎡当たり100～150ℓ）
- 被覆** かん水終了後、透明マルチで地面を被覆する。
- ハウスの密閉** ハウスを密閉し3週間程度設置する。開始後1週間以内にドブ臭がすれば消毒成功。
- 消毒終了後処理** 放置後、被覆用透明マルチ、チューブなどを撤去し数日間解放するとともに、耕起を行い還元状態を酸化状態にして終了。

花卉

竹川 慶剛
上島宮農指導センター
080-1729-1637



6月・7月の柑橘園管理



果樹

原口 悠貴

下島営農指導センター
080-2725-7775

1. 病害虫防除

品 種	対象病害虫	属性	農薬名	希釈倍数	散布時期
温 州	カイガラムシ類 ゴマダラカミキリ	普通物	トランスフォーム フロアブル	2,000倍	6月上旬～下旬
	黒点病	普通物	混用 ジマンダイセン水和剤	400倍	
	展着剤	普通物	加用 アビオンE	1,000倍	
	ミカンハダニ	普通物	ハーベストオイル	200倍	6月中旬～下旬
	黒点病	普通物	ジマンダイセン水和剤	400倍	
	ミカンサビダニ	劇物	ハチハチフロアブル	2,000倍	
	アザミウマ類 ゴマダラカミキリ	普通物	リーズン顆粒水和剤	2,000倍	7月中旬～下旬
	黒点病	普通物	エムダイファー水和剤	600倍	
中晩柑	カイガラムシ類 ゴマダラカミキリ	普通物	トランスフォーム フロアブル	2,000倍	6月上旬～下旬
	黒点病	普通物	混用 ジマンダイセン水和剤	600倍	
	展着剤	普通物	加用 アビオンE	1,000倍	
	ミカンハダニ	普通物	ハーベストオイル	150倍	6月中旬
	黒点病	普通物	ジマンダイセン水和剤	600倍	6月下旬
	ミカンサビダニ	劇物	混用 ハチハチフロアブル	2,000倍	
	アザミウマ類 ゴマダラカミキリ	普通物	リーズン顆粒水和剤	2,000倍	7月中旬～下旬
	黒点病	普通物	エムダイファー水和剤	600倍	
共通	カメムシ	普通物	スタークル顆粒水溶剤	2,000倍	発生時
		劇物	テルスターフロアブル	3,000倍	

※ハーベストオイルについては、落果の多い樹・樹勢低下樹には使用を控えてください。 ※カイガラムシが多い園では、再度エルサン乳剤 1,000倍を散布。(6月中旬～下旬) ※アザミウマ類、ゴマダラカミキリはアドマイヤーフロアブル 4,000倍も使用可能です。(7月)

2. 施 肥 (通常タイプ)

施用時期	肥 料 名	品種名	10a当たり
6月上旬	果樹専用スペ シャル 又は 果樹専用「極」	早生・中熟・普通温州	2袋
		ポンカン	3袋
		清見・甘夏 パール柑・河内晩柑	5袋
		デコボン	4袋
7月上旬	新アグリロング 28号	全品種	5袋

3. 葉面散布

目的	薬 剤 名	希釈倍数	備 考
樹勢維持	尿素 又は 神協スピリッツ 又は ニューアミノ ジューシー	500倍	新梢の緑化の遅れは、 生理落果の助長を招き ます。チッ素+マグネシ ウムの葉面散布で緑化 促進を図りましょう。
	緑化促進	200倍	
新梢の充実 果皮強化対策	ジューシーカル 又は バイカルティ	1,000 倍	温州・デコボン等

4. 粗摘果の実施

早期に摘果を行う事により、残った果実の肥大が促進されます。基本的には生理落果終了後から行いますが、極早生温州など収穫までの日数が短い品種では、2次落果頃から摘果を行う事により肥大が促進されます。



収穫までの管理



水 稻

田代 好幸

農畜産課
0969-22-1105

◎いもち病の対策

葉いもちが例年、多発している状況です。畦畔の草刈り及び稲の状況を観察し、病気が発生していないかを確認してください。

葉いもちが発生している場合は、臨時防除としてブラシン粉剤(フロアブル)を散布してください。(予防剤及び治療剤)

注) 散布した場合、出荷米は一般米扱いとなりますが、収量の確保を優先してください。

◎出穂期からの水管理

穂ばらみ期から出穂期にかけては稲の体力消耗が激しくなりますので、深水管理をして下さい。出穂期以降は、浅水での間断灌水に切り換えて下さい。

参考：適期刈取りの目安は、出穂期(ほ場の40%程度出穂した日)から35日たった頃です。

◎病害虫防除

・1回目…例年、6月下旬頃から出穂する時期となりますので、水田の約5～6割程度の出穂が確認できる時期に、いもち病・カメムシ等の対策として「トライスタークル」の散布をお願いします。

注) 今年度は、カメムシ等の害虫が多発する傾向となっていますので、ほ場を巡回しながら、散布を実施してください。

・2回目…前回散布から7～10日後に、カメムシ等の対策として「キラップ」の散布となります。

注) 散布の際は使用基準を遵守し、飛散等がないよう心がけて下さい。また、散布された際には栽培管理台帳への記入をお願いします。

・害虫の予防対策について

水田周囲の草刈り及び除草をすることで、害虫の隠れ場所を減らし発生を低減できますので、管理の徹底をお願いします。